

大学の授業における笑いの一研究

瀧 口 綾

A study on humor and laughter at university education

TAKIGUCHI Aya

抄 録

大学の授業における学ぶ側の笑いのとらえ方について検討した。114名の東京近県にある医療・福祉系の私立大学の学生を対象に調査を行った。その結果、性差については有意な差は見られなかったが、学科間で有意差が見られた。理学療法学科の学生は作業療法学科及び福祉心理学科の学生と比較して、授業中、教員のギャグが多いと面白い授業だとは思っておらず、授業中笑える部分大きいと印象に残るとは感じていなかった。理学療法学科の学生は、授業に集中するためや気分転換など、より積極的に授業に参加することに笑いをを用いている可能性が推察された。

キーワード：大学教育

笑い

性差

面白い授業

気分転換

I. 問題と目的

笑いの効果や意義について、これまでさまざまな側面から研究がなされてきた。

教育現場における笑いの活用や効果についての研究は多くされており、笑いやユーモアを使うことで子どもたちにとってわかりやすく楽しい授業となり、さらに理解が深まる。研究の対象は、小・中学生が多く（池田、2005；上条、2005他）、教員が子どもたちにどのように教えることがより深い理解につながるのかという、教える側に関する検討がほとんどであり、授業を受ける側からの研究はあまり見られない。

では大学教育ではどうか。

まず現代の大学をとりまく状況を見てみると、少子化や大学全入学時代の到来で、大学教育のあり方も大きく問われている。学生のニーズの多様化などからも大学に求められるものも同様に多様化しており、大学は教育改革を余儀なくされている。このような背景にあって入学してくる学生に合わせた有効的な学びについて、さまざまな検討や実践もなされている。このような状況の中で、大学教育に笑いをういた実践や研究は行われているが、まだ少数である。

榊原他（2004）は、学校教育の中に笑いを教室に持ち込むことについて、教える側の「学びたくなるようにさせる」ためにどのように仕向けるかが課題であるとしている。学校教育の中の笑いが、学校再生につながることも指摘しており、その手段の一つが、笑いをを用いるということである。大学教育で笑いをういている木俣（2001）は、法学部の授業で笑いを取り入れた実践を行っており、学ぶ側のニーズを「楽しみながら、役に立つ教養を身につけたい」のではないかと述べている。

大学生が「面白いと感じる授業」はどのような授業かについて行った調査（瀧口、2013）では、「（面白いと感じる授業は）笑いのある授業」という意見が多くみられており、具体的には「笑えると身につきやすい」「集中力が高まる」などの学生の声がかかれた。また性差についても調べた結果、男性より女性の方が、授業中の「集中力の回復」や「気分転換」といった、笑いそのものが必要というよりも、より積極的に授業にのぞむための一つの手段が笑いの役割という意識を持っていることが示された。さらに井上（2004）によると、笑いには、ともに笑いあうことで、互いの距離が縮まり集団の一体感が強まる作用もあるとされることから、学ぶ側の一体感によって授業内容の理解が深まる可能性も考えられるだろう。

最近では、笑いの効果そのものだけでなく、性差についても研究が始まっているが、学校教育の中の笑いの性差に関しては、ほとんど研究がなされていない。

木俣（2006）は、アトピー性皮膚炎の患者のアレルギー反応について調べている。アレルギーの改善に伴って笑顔が増えるのは女性の方が多く、しかも女性の方が男性よりも笑う回数も多く、笑い声の大きさも大きく、笑う時期も女性の方が早いことを明らかにしており、女性の方が男性より笑いに敏感であり、笑いの効果を受けやすく、医学的な効果も女性の方が高いと指摘している。伊藤（2012）は大学生の笑いに関する性差を

調べ、女性は男性よりも笑いが健康につながると感じていること、人をバカにする笑いを好ましく思っていなかったこと、「笑い」を色に例えると暖色系だと感じていること、一方、男性は、女性より異性を笑わせたいと思う欲求が高いという結果を得ている。

そこで、本研究では大学教育の中で、学ぶ側がどのように笑いをとらえているのかについて検討することを目的とした。学科、学年及び性差を通して明らかにする。伊藤（2012）の「大学生の意識調査」の質問項目を参考にし、さらに大学教育の中の笑いに関する質問項目を加え質問項目を作成した。

Ⅱ. 方 法

1. 調査対象者： 東京近県にある医療・福祉系の私立大学理学療法学科、作業療法学科、福祉心理学科の1～4年生114名（理学療法学科12名、作業療法学科29名、福祉心理学科73名）を対象とした。
2. 調査時期： 2014年7月の講義中に行った。対象者には調査の趣旨と概要を説明し、同意を得た上で実施した。
3. 調査内容： 質問紙による調査を行った。質問紙調査は、大学に在籍する1～4年生を対象に行い、回答に不備のあった者を除いた19～34歳の114名（男性58名、女性56名）を分析対象とした。分析対象となった男子学生の平均年齢は19.5歳（SD = 1.7）女子学生の平均年齢は19.4歳（SD = 6.4）であった。

質問紙の構成は、基本属性として、調査対象者の年齢、性別、学科を尋ねた。質問項目は Table 1 に示した通りである。

質問内容を設定するにあたり、伊藤（2012）の「大学生の意識調査」24項目からなる質問項目を用い、さらに大学生の授業に関する笑いの意識調査（瀧口、2013）を参考に、合計29の質問項目を設定した。質問項目の得点化や提示方法及び分析方法は伊藤（2012）にならい、以下のように行った。各質問の得点化については、7段階評価で回答を求め、質問内容を肯定する回答7点、その対極を1点として処理し、質問5と質問20は同じ質問内容を提示し、同一回答者において2以上の差があった場合、回答不備のあった者として分析対象から外すこととし、分析には前者を採用した。

Table 1 質問項目一覧

質問項目	
1	お笑い番組をおもしろいと思う
2	笑いには空気を読むことが必要だと思う
3	笑ってはいけない話題があると思う
4	笑いによりリラックスできる
5	笑わせる技術を身につけたい
6	笑いにはテンポが必要だと思う
7	笑いには知性が必要だと思う
8	笑われて不快な思いをしたことがある
9	人を笑わせるようになりたい
10	芸人のネタについて「なるほど」と思う
11	人と会話するとき相手の表情が気になる
12	友だちの前で笑う
13	人をバカにする笑いはよくないと思う
14	テレビを見ているとき笑う
15	笑うことは健康につながると思う
16	芸人のネタについて「そんなあほな」と思う
17	芸人のネタには安定感があると思う
18	コミュニケーションにおいて笑いは必要
19	「笑い」を色に例えると暖色系だと思う
21	雰囲気馴染まない笑いにはイライラする
22	家族の前で笑う
23	人を笑わせるのは難しい
24	異性を笑わせたい
25	お笑い番組を見る
26	授業には笑いは必要だと思う
27	授業中は教員のギャグが多いと面白い授業だと思う
28	授業中笑える部分が多いと印象に残る
29	授業中笑えると講義を聞いているときとのメリハリができる
30	授業中笑えると自分の身近な体験から学ぶことができる

Ⅲ. 結果と考察

1. 授業中の笑いのとらえ方に関する学科及び学年間の検討

学科間及び学年間で授業中の笑いのとらえ方に有意な差があるかどうかを検討した。

それぞれで、一元配置法の分散分析を行った結果、学年間では有意差は見られなかった。

一方、学科間では「Q27 授業中は教員のギャグが多いと面白い授業だと思う」($F(2,110)=4.440, p<.05$)、「Q28 授業中笑える部分が大きいと印象に残る」($F(2,111)=4.192, p<.05$)で有意な差が見られた。Table 3 に示したように Tukey 法を用いた多重比較によれば、「Q27 授業中は教員のギャグが多いと面白い授業だと思う」では、理学療法学科と作業療法学科及び福祉心理学科の間に、作業療法学科と理学療法学科、福祉心理学科と理学療法学科にそれぞれ有意差があり、理学療法学科は他学科に比べて、授業中は教員のギャグが多いと面白い授業だと思っておらず、作業療法学科及び福祉心理学科の学生は、理学療法学科の学生と比較して授業中、教員のギャグが多いと面白い授業だと感じていた。また「Q28 授業中笑える部分が大きいと印象に残る」では、理学療法学科と作業療法学科及び福祉心理学科の間、福祉心理学科と理学療法学科の間で有意差が見ら

Table 2 Tukey 法による多重比較の結果

	学科比較		平均値の差	標準誤差	p 値
Q27_ 授業中は教員のギャグが多いと面白い授業だと思う	理学療法学科	作業療法学科	-1.42	0.52	0.0195*
		福祉心理学科	-1.35	0.47	0.0136*
	作業療法学科	理学療法学科	1.42	0.52	0.0195*
		福祉心理学科	0.07	0.33	0.9761
	福祉心理学科	理学療法学科	1.35	0.47	0.0136*
		作業療法学科	-0.07	0.33	0.9761

			平均値の差	標準誤差	p 値
Q28_ 授業中笑える部分が大きいと印象に残る	理学療法学科	作業療法学科	-1.09	0.48	0.0670*
		福祉心理学科	-1.27	0.44	0.0126*
	作業療法学科	理学療法学科	1.09	0.48	0.0670
		福祉心理学科	-0.18	0.31	0.8275
	福祉心理学科	理学療法学科	1.27	0.44	0.0126*
		作業療法学科	0.18	0.31	0.8275

* $p<.05$

れ、理学療法学科の学生は他学科よりも授業中笑える部分が大きいと印象に残るとは思わず、福祉心理学科及理学療法学科の学生と比較すると、授業中笑える部分が多いと印象に残るという結果が得られた。

学校という場合は、人間すなわち人格を育てる場ととらえられているため、常識から外れるものや不真面目に感じられるものは好ましくないと排除されてきた(榊原他、2004)。大学教育においてもほぼ同様であろう。このようにある種の緊張感を伴う学校教育の中で、どのように学びを豊かにするのか、その一つの手立てが笑いの活用であるといえるだろう。笑いは緊張の緩和である(井上、2004)といわれることから、理学療法学科の学生は、他学科の学生と比較して、教える側から放たれるギャグやジョークが、授業の面白さより授業に集中して取り組んでいる合間の小休止(榊原、2004)としてとらえている可能性が考えられる。したがって、授業中笑える部分が大きいと印象に残りやすいとはあまり感じていない、という結果も同様の要因ではないだろうか。授業中における笑いについて、集中力の回復や気分転換といった側面を強く感じていると示唆される。

一方、作業療法学科及び福祉心理学科の学生にとってはどうか。「授業中笑える部分が多いと印象に残る」ことに関して、「笑った・笑えた」ということが、なにがしかのことがわかり得たという結果である(山口、2012)と指摘されるように、笑ったことで、「理解できた」「身についた」という印象を強く持つのではないだろうか。

学生のニーズが多様化する中、教える側には、主体的に「学びたくなるようにさせる」工夫が必要であり、その手立ての一つが授業に笑いを授業に持ち込むという方法である(榊原他、2004)。その上で、学ぶ側の学生は、授業の中の笑いをどのようにとらえ、専門的な知識や技術の理解を深めているのか。各学科の専門性の違い等の観点からも検討を行う必要がある。教える側が、学ぶ側のとらえ方の特徴を理解した上で笑いの効果的な活用方法を検討していくことが求められるであろう。

本研究は学科間の人数の偏りが大きいため、今回の結果が、各学科の学生の特徴を表わしているとは言い難い。今後は、学科ごとの調査対象者数を同数にして、さらに検討する必要があるだろう。

2. 笑いと性差

各質問項目における男女別の平均値及び標準偏差は Table 3 のとおりである。

各質問項目について男女差があるかどうかを調べるため、t 検定を行った。その結果、質問10「芸人のネタについてなるほどと思う」($t = 2.27, df = 112, p < .05$)、質問19「「笑い」を色に例えると暖色系だと思う」($t = 3.87, df = 112, p < .01$)、質問24「異性を笑わせたい」($t = 4.52, df = 111, p < .01$)で有意な差が見られた(Figure 1)。

授業中の笑いに関する項目では、男女の間に有意な差は見られなかった。

男性の方が、芸人のネタについてなるほどと思っており、また異性を笑わせたいと感じていた。また女性の方が「笑い」を色に例えると暖色系だと思っていた。

Table 3 各質問項目の男女別の平均値と標準偏差

質問項目	男性 (n=58)	女性 (n=56)
1	5.52(1.55)	5.46(1.62)
2	5.97(1.21)	5.50(1.39)
3	6.16(1.35)	5.91(1.37)
4	6.02(1.10)	5.91(1.54)
5	5.62(1.57)	5.25(1.60)
6	5.97(1.14)	5.66(1.24)
7	5.98(1.29)	5.57(1.39)
8	4.42(1.70)	4.84(1.54)
9	5.59(1.51)	5.04(1.56)
10	4.93(1.66)	4.23(1.63)
11	5.57(1.40)	5.71(1.16)
12	6.24(0.92)	6.38(1.05)
13	5.38(1.59)	5.48(1.53)
14	5.60(1.39)	6.02(1.37)
15	6.40(0.90)	6.33(1.26)
16	4.53(1.45)	4.02(1.61)
17	4.40(1.79)	3.88(1.48)
18	6.03(1.39)	6.29(0.93)
19	5.60(1.36)	6.45(0.91)
21	4.72(1.70)	4.75(1.44)
22	5.71(1.30)	6.13(1.49)
23	5.25(1.67)	5.00(1.39)
24	5.76(1.38)	4.56(1.42)
25	5.28(1.73)	5.02(1.84)
26	5.46(1.45)	5.51(1.33)
27	4.97(1.44)	4.64(1.66)
28	5.48(1.56)	5.70(1.32)
29	4.78(1.63)	5.16(1.69)
30	4.95(1.49)	4.98(1.51)

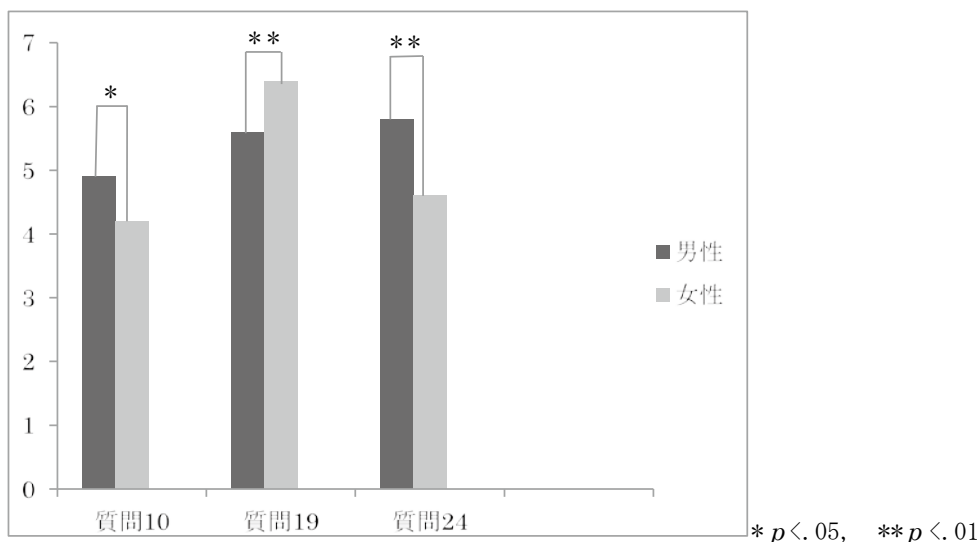


Figure 1 質問10, 19, 24の男女別平均値

男性の方が異性を笑わせたいと強く感じているという結果は、伊藤 (2012) の調査結果と同様であったが、男性の方が芸人の笑いのネタや内容に関心があるというのは、伊藤 (2012) の調査結果とは違っていた。上野 (1996) が指摘しているように、人を笑わせたいという気持ちは男性に強く、相手を笑わせられるかどうかが対人関係において重要であるとされるが、さらに芸人のネタや内容について、どのように相手を笑わせようかと思索する際の参考としている可能性があるのではないだろうか。医療・福祉分野での専門家を目指す学生にとって、コミュニケーションが大事なのはいうまでもない。目の前の方とより良い対人関係を築きたいという現れなのかもしれない。

男性より女性の方が「笑い」を色に例えると暖色系だと感じていた、という結果も、伊藤 (2012) の調査と同様の結果であった。伊藤 (2012) が指摘しているように、黄色やオレンジ色などのあたたかみを感じる色が連想されやすく (伊藤, 2011)、オレンジ色などの暖色は親しみやすさや心地よさを与える (平湯, 2002)。コミュニケーションにおける笑いの役割の一つは、相手との協調を示すといわれている (志水, 1998)。女性の笑いに対するイメージは、あたたかいものであり対人関係の維持や相手との親和を表現していると考えられる。

本研究では、授業中の笑いに関する性差は見られなかったが、今後の課題として、授業の中の笑いのとらえ方を検討する際、先行研究である伊藤 (2012) の調査や本研究の笑いに関する性差の調査結果から、性差の影響を考慮する必要があるだろう。

参考文献

平湯文夫 (2002). 利用したくなる情報空間をめざして—図書館の家具とレイアウト—. 情報の科学と技術、

52(1), 3-8

- 池田修 (2005). こんな時どう言い返す ユーモアあふれる担任の言葉 学事出版
- 井上宏 (2004). 『笑いのすすめ』 世界思想社
- 伊藤理絵 (2011). ヒトは「笑い」から何を思うのか:「笑い」のイメージに関する検討 笑い学研究, 18, 50-58
- 伊藤理絵 (2012). 笑いの性差に関する検討: 大学生の意識調査から 笑い学研究, 19, 122-127
- 上条晴夫 (2005). お笑いの世界に学ぶ教師の話術 たんぽぽ出版
- 木俣肇 (2006). アレルギー科における笑いの効果の男女差～笑いの効果は、女性上位～性差と医療, 3, 47-49
- 木俣由美 (2001). 笑いと大学教育—漫才や落語で楽しく学ぶ— 笑い学研究, 8, 3-8
- 榎原禎宏・雨宮勇人・瀧川梨恵・七瀬 昇・大和真希子 (2004). 教室における笑いの可能性 山梨大学教育人間科学部紀要 6, 134-150
- 志水彰 (1998). 「笑い」の治癒力 PHP 研究所
- 瀧口綾 (2013). 大学生が感じる「面白い授業」とは～大学生が授業に求める「笑い」(ポスター発表), 第19回日本笑い学会, 新潟2012.7
- 上野行良 (1996). 「笑わせる」ことによる対人操作 対人行動学研究, 14, 30-32
- 山口政信 (2010). わからなければ笑えない 国文学—解釈と鑑賞— ぎょうせい, 75, 116-123

Abstract

The present study investigated how university students considered humor and laughter in class. One hundred fourteen first-through fourth-year students attending a small-size health care/welfare university were surveyed. There were no significant differences between genders in how humor and laughter in class were viewed. There were, however, significant differences among students' academic majors. Compared with those majoring in occupational therapy and psychology and welfare, physical therapy majors were less likely to believe that teachers' jokes would make classes more interesting, and that class topics involving more laughter would give them stronger impressions. It was discussed that physical therapy majors may make use of humor and laughter in order to actively participate in class rather than to concentrate and relax during class.

Key words : university education
humor and laughter
defference between genders
beneficial class
relaxation